

松村神父の勝手に独り言

2020年4月9日 聖木曜日に向けて

2020年の聖木曜日に「主の晩餐の夕べのミサ」を皆さんと共に捧げるという一途の願いは叶わなくなり、非常に残念に思います。なぜならば“聖体の制定”“司祭職(特に奉仕職)の更新”そして“隣人愛”を思い起こす最後の晩餐は、信仰を生きる私たちにとって本質にかかわる出来事だからです。でも離れていても心を合わせて祈ることで私たちは隔てられた距離や空間を超えて、神様が結び付けてくださると期待と願いを込めてそれぞれの場で祈りあっていきたいと思えます。

さて、この度のリーマンショックを超える経済危機に匹敵するコロナショック。100年前のスペインインフルエンザ、中世から近代に流行ったペストを思い起こさせられ、一人一人のいのちを脅かし、既にコロナウイルスの保菌者である可能性を秘めている私たち。(ただ発病していないだけの人も多くいるのも事実である。)この状況は初代教会のキリスト者のローマ帝国による迫害と同じ状況とみることができるのではないのでしょうか。今私たちは見えない迫害を受けています。祈りで乗り越えようとしても家から出れば現実にはローマ帝国軍によって迫害され殺されていたように、私たちにコロナウイルスは襲いかかってきます。この当時の状況はある意味同じなのかもしれません。フランシスコ教皇もコロナに苦しんでいる人に寄り添うよう当初励ましが与えられた後、すぐに北イタリアの司祭から多くの死者を出してしまいました。これをどのように見たらよいのでしょうか。多くの人からその疑問を投げかけられました。教皇の発言は殉教命令とも取られかねないからです。

いろいろな評価を耳にします。でも、そこには学びがあるはずで。私は教皇の発言に信仰者としての学びの二面を見ることができるのではないかと感じました。隣人愛の実践には、時には負の要素をあえて受け入れていかなければならないという側面がある事。「ハリネズミのジレンマ」という話をヒントに、私は「ハリネズミの親子」と題してしてこの出来事を受け取りたいと思えます。それは、次のような話です。ハリネズミの子どもが狼に襲われそうになり、恐怖と緊張の中、針を立てています。親は狼を針で威嚇して追い払うのですが、子どもは恐怖で体がこわばらせたままです。そのためその針を緩めることができません。母ハリネズミは子どもを慰めるために、自分に刺さる針で血だらけになりながらも抱きしめ癒していきます。お母さんのぬくもりに気が付いて、子どもはやっとその針を緩め、徐々にお母さんの肌のぬくもりの中に入っていくのです。この母の姿こそキリストの奉仕者としての務めなのかもしれません。このように血を流す事を私たちは知らず内に「平和ボケ」の中で忘れてたり遠のいていたりしているのではないのでしょうか。「血を流しなさい！」と言っているわけではありません。その心を忘れてはいけなと教皇は語ったのではないのでしょうか。心にくさびを差し込まれ、死と隣り合わせて生きる程の覚悟の信仰とは何かということが問いかけられているように感じます。

もう一面は、教皇の発言は「殉教しなさい」と言う意味ではありません、見えない敵に対して、どれほど私たちは隣人愛の遂行として正しくかかわるべきか？現代の医療科学の情報をしっかり学び、更に苦しむ人を増やさなよう、総合的な配慮はどこまでできるのか？という問いかけでもあるのかもしれません。決して亡くなった北イタリアの司祭を否定しているわけではありません。亡くなった司祭たちも十分配慮したに違いありません。しかしそれでも亡くなり、また人に感染させてしまった失敗もあります。だからそこからよく考え、一步一步慎重に人々に寄り添っていかなければならないことを示されたのだらうと感じました。現代の科学技術・医療技術・情報等、正しく聞き、正しく理解し、正しく行動すること。そして自分の動きが他者にどのような影響を持つのか、総合的に他者への配慮を考え尽くすという隣人愛の精神は尽きることがないが、私たちはどこまでそれを考えているのだろうか。自分の理想のため、自分のエゴのため、自分の正義のため、自分が知っている範囲での判断。隣人愛は目先の善だけにとらわれない全人類の共通善、総合的な視点も必要であることを、私たちはしっかり学ばなければなりません。

そのヒントは『ラウダート・シ』に描かれている世界家族・地球家族という概念と、昨年11月に来られた教皇の訪日テーマ『PROTECT ALL LIFE～すべてのいのちを守る～』は、まさに預言的に私たちに与えられていたことを思い起こしたいと思えます。

隣人愛を今一度思い起こし、再三の注意を払いながら愛することをこの木曜日に考えてみたいものです。
.....という独り言でした。